

五稜郭、箱館奉行所復元工事見学会

1. はじめに

来年平成 21 年に函館開港 150 周年の節目を迎える。その開港当時にはあったはずの五稜郭奉行所が、今、復元しようとして一昨年の夏から工事が始まった。着工よりすでに二年の月日が経ったところである。今回、函館市、および竹中工務店 JV、文化財保存計画協会の快諾を得て、見学会を催すことができた。そしてさらに今回の研修会は、現場見学に加えて、元函館市史編纂室室長の紺野氏から五稜郭築造当時の時代背景についてお話をいただいた。

2. 研修会概要

○開催日時 2008 年(平成 20 年) 6 月 20 日

○研修場所 函館中央図書館大研修室及び
箱館奉行所復元工事現場

○参加者 35 名

第 1 部

亀田御役所土塁（五稜郭）について

講師 紺野 哲也 氏（元函館市史編さん室長）

第 2 部

復元工事の概要と現状について

講師 箱館奉行所復元工事業務所

所長 塚田 芳久 氏（竹中工務店）

箱館奉行所復元設計について

講師 (株)文化財保存計画協会

主任研究員 木下 寿之 氏

3. 研修報告（抜粋）

亀田御役所土塁（五稜郭）について

紺野氏によると、特別史跡五稜郭跡は、全国にある特別史跡 67 カ所のうち、最初に指定された特別史跡であるという。そして、それは五稜郭跡であって、五稜郭ではないそうだ。そもそも特別史跡とは、人間でいえば国宝に相当するものであり、国宝級の場所なのだ。つづいて五稜郭の築造に至るその時代背景についてお話があった。幕末当時の北方警備の要

として五稜郭が築造されたのだが、はじめから星形で考えられたのではなかった。築造するに当たっての申請書の段階では、まだ図面も無かったのだという。だから当時の正式名は五稜郭ではなく亀田御役所土塁なのだそうだ。その箱館奉行の竹内保徳の日記に、縄張りしたときに五稜郭という記載がでてくるという。それでは五稜郭を設計したという武田斐三郎はいったい誰からその築城法を教わったのかというと、蘭学書からではなく、当時箱館を訪れたフランス軍艦コンスタンチーユの軍人からだという。だから五稜郭はフランス式築城によるものらしい。



紺野氏の話はまだ続きそうではあったが、復元途中の箱館奉行所が我々を待っている。そそくさと徒歩で工事現場まで移動した。

復元工事の概要と現状について

工事事務所で、はじめに塚田所長のお話を伺った。特別史跡の復元に当たっては、文化庁の許可が必要であり、それによると、地面を掘削できないのだという。それでは基礎工事ができないではないか。そのとおり、基礎は H 鋼とコンクリート塊を組み合わせ、その面を置いて、その面で支えているという。現場事務所も同じであり、風などに対してはその重量で支えているというのだ。しかも、建築基準法の適用を受けるとは。自然災害を相手にする工事ではない、文化庁を相手の工事ということなのか。五稜郭公園裏の橋は、工事車両の荷重に耐えられないらしい

く、その橋の上に工事用の仮設橋を架けた。屋上屋を架すとは聞いたことがあるが、橋上橋を目の前にして完成までまだ2年と聞き、なるほどと感心してしまう。



箱館奉行所復元設計について

続いて、文化財保存計画協会の木下主任研究員から復元設計についてお話を伺う。箱館奉行所の復元に当たっては、当時の資料を丹念に調べ上げなければならなかったという。特に当時の箱館奉行所の写真が残っていなければ、復元工事に至ることはできなかったのだという。

五稜郭絵図によれば、北側に役人の住居である役宅が位置し、さらにその周りに方井があった。その囲いの位置に樹林が植えられたらしい。今でも残る市立函館高校南側や、大妻高校裏にある風致林、五稜郭病院通りにかつてあった林が、そうらしい。

また、和釘、とんとん葺きの竹釘、左官の塗り土の配合、懸魚(ぎょぎょ)、釉薬、だるま瓦等々のお話があった。図面作成に当たっては写真からの透視図法などを用いて復元したという。工事は、どのように見えるかどうかを確認するため試験葺きをしながら進めている。そして、現場との指示などのやりとりは、メートル法ではなく尺貫法によっているという。その方が、よりの確に指示できるらしい。

箱館奉行所復元現場

奉行所がすっぽり工事上屋内に収められており、すべて屋内工事である。とんとん葺きが今施工中である。築造時に用いられた左官土が今塗られている。工事上屋外壁には、瓦葺き正面の絵が掲げられている。



完成後はこのように見えるようにと工事が進められている。出来上がり図面を外壁に画いてそのとりに作り上げていくその復元作業は、建築工事というより、まるで彫刻の作業のようである。



4. おわりに

五稜郭公園内で行われている復元工事の進捗具合が気になる方が多くいたらしく、いつものCPD研修会に比して、多くの参加者を得ることができた。この研修を通じて道南の技術史の再認識を図り、ひいては開港150周年を迎えるに当たっての一助になれば大変喜ばしいものと考えている。また、かつての箱館奉行所が取り壊されるまでわずか7年しかなかったのだから、復元後の奉行所の方が長寿になるであろうと願うばかりである。

見学会をお引き受けくださった函館市、竹中工務店JV、文化財保存計画協会に感謝申し上げ、また元函館市史編纂室長の紺野氏をはじめとして竹中工務店の塚田所長、文化財保存計画協会の木下主任研究員には講師を快くお引き受けくださいましたことに感謝いたしまして、今回の活動報告としたい。

(文責：道南技術士会幹事 吉田 一雄)